

特101

81

朝報懸賞文庫

第貳編

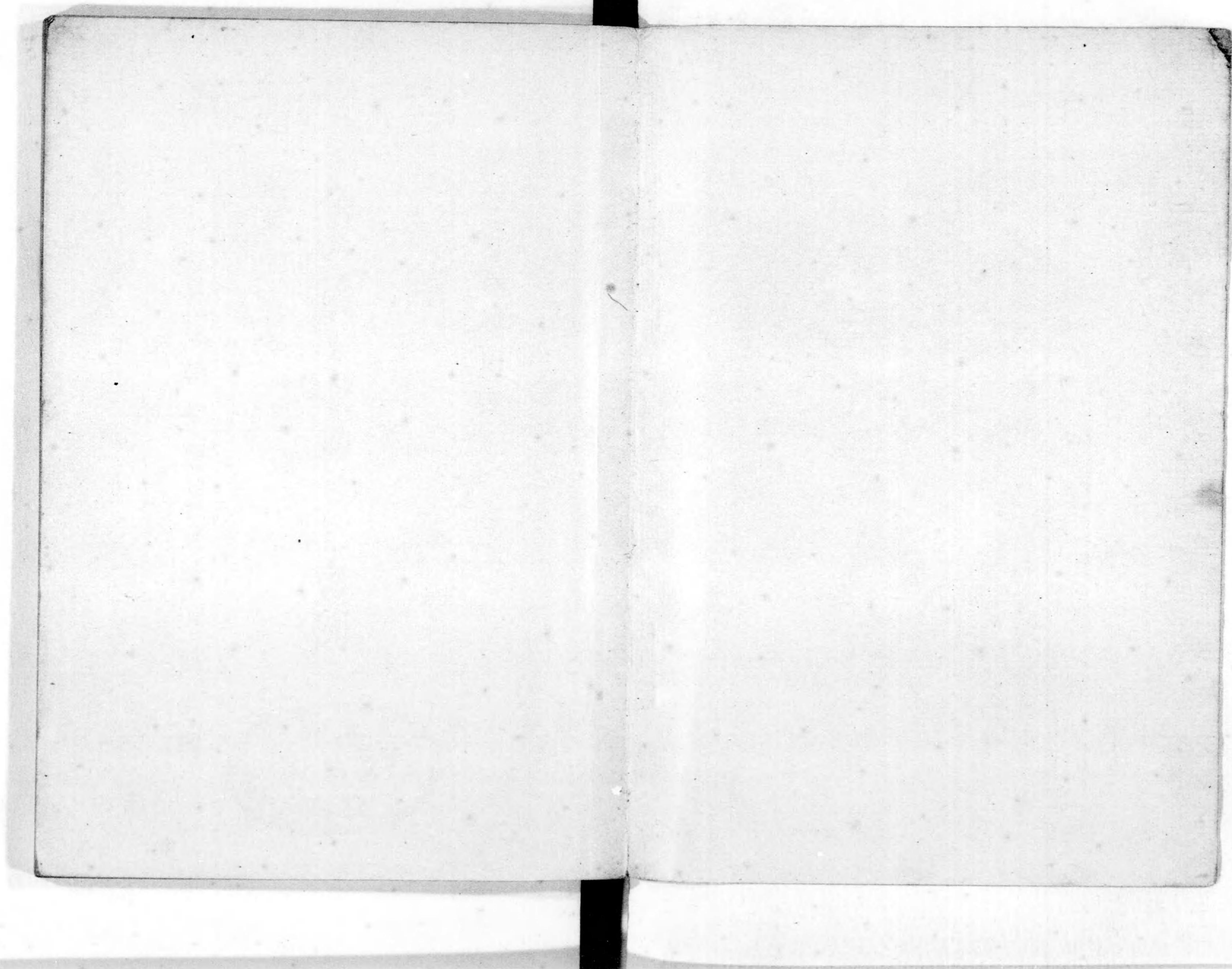
余の最も感動せし實例

中央書院發行



始





朝報社編輯局選



余の最も感動せし實例

朝報懸賞文庫 第貳編

大正
3. 8. 27
内交

はしがき

一 萬朝報社の懸賞文は痛快にして感奮せしむるもの、趣味津々禁ずべからざるもの、而かもこれ一片の空想にあらずして、何れも経験の力なればこそかくも胸中の琴線に觸るゝの響きいとど大なれ。由來新聞の記事は一讀して顧みざるもの多しと雖も、萬朝報紙上に掲げられし、此等の記事は、教訓上より將た娛樂上より見て、之を埋没せしむるに忍びず、乃ち朝報社に請ふて此に刊行を企たてし所以なり。

余の最も感動せし實例

萬朝報編輯局選

(一)

在東京本郷區新花町

梶井雅

僕の舊師に大島と云ふ體操の先生がある軍人あ
がり丈けに極めて萬事に嚴重であるが、其れと

一本書は萬朝報紙上に懸賞の選に入りしもの掲載せし分を採録せり。即ち余が痛快を感じたる實例、我が自慢話、余が感動せし實例、余が可笑味を感じたる實例等にして此等の諸篇皆活きたる模範として社會風教上に多大の効果を貽すべきや必せり。其他は後日刊行して本書と共に世の裨益をはからんことを期せん。希くば江湖諸彦の一讀を切望す。

大正三年八月

西歐の天地戰塵の漲る時

云つて亂暴な叱責などはされぬ、其れを好い
事にして腕白をやるのが僕等の級だつた、去夏
の某日、僕等の仲間數名、程遠き正木の濱の鹽
湯へ始めて行つた、其の時小窓から見える砂利
道を不恰好に人力車を曳いて來る人があつた、
どうも其の姿が吾が大島先生そつくりだつた、
眞逆とも思つたが亂暴組は總立ちて見て居た、

一步／＼に近づく其の車夫こそ正しく立派な髭
のある吾が先生だ、餘り意外なのに傍若無人の
我黨も異口同音『先生だ』と云つたぎり、コン
／＼裏口の方へ姿を隠して顔見合せた、程經て
先生は浴後の心地よげなる車上の老人を見返り
ては打ち笑まれつゝ、徐に歸られた、三助に聞
けば『先生は多年宿痾に悩まれる、御尊父を他

の車夫に任すを不安に思はれて自ら車を曳いて
毎日あの通り』と語つた、涙を出したのは僕ば
つかりてはなかつた、其後は吾が級も決して亂
暴せぬのみか非常に先生を敬慕した。

(三)

岐阜縣吉城郡船津町

高橋 登

鑛山の従業員は一般に職務が過激で其執務時間
なども多くは十二時間制度になつてゐるが、此
職務に服して尙且つ驚くべき精力絶倫なる人が
居る、夫れは陸中の某鑛山に勤務せる黒須茂と

云ふ一現業員である、氏は小學校卒業後鑛山冶金課の雜役に従事せる傍ら、盛んに獨學して今日では採鑛冶金學の原書及び高等數學等に至る迄容易に解し得る非凡なる頭腦を有して居るが、其日常の勤務時間の如きは、午前四時より五時迄の間に出勤して始業定時の六時迄は事務所備付の原書や參考書に就て研究に耽り、執務時間

中は自己管理の作業場より瞬時も離るゝ事なく退出時間の午後六時に事務所を引上げ當日の作業成績に就て攻究する事約二時間内外にして退出、歸宅の上は又々夜半迄斯業に必須の専門學を漁り、就寢は十二時過一時前後、起床は大抵午前四時頃で、睡眠僅に三時間内外であるが、剛健なる體軀は些の消耗する所なく、余の知れ

る數年間嘗て一日も怠つた事が無い、此献身的の執務振りと驚くべき氏の精力には感嘆の外は無い、如上は余の目撃して最も感動せる實例である。

(三)

高知縣土佐郡小高坂村森下

海部 トメ

丁度天長節の朝であつた、學校では最う式が始まるといふのに何時も早い櫻木といふ女教員が見えない、何うしたのであらうと噂して居ると間一髪の時平常着其儘で駆け込んで来た、譯を

聞いて見ると昨夜上下揃へて支度してあつた紋付を妹が登校間際に池へ投込んで仕舞たので何うする事も出来ず、彼是捜して居る内に時間が来たので駆けて来たとの事、豫て其の妹の事は聞いて居たが其程迄とは思はなかつたので皆大變同情した、此の人は父母に早く死なれ弟と妹との三人暮しをして居る、弟は學士で今東京で

務めて居る、妹はどういふものか若い時氣が變になつて今尙直らない、其が又大變な姉嫌ひで姉が一生懸命勞れば勞る程反つて氣に入らず一々逆らつて果ては何時も腕力に訴へるので姉は始終生傷の絶え間がない、それで病院にても入れてはと勧めると『入れて直るものなら悦んでするが直らないものを他人の中で狂人扱ひにせ

られるのが可愛相だから』と云つて應じない、
弟さんの所へといふと『出世の害になるから』
と云つて其もしない、今でもう十年餘り今自分
の事は願はず一筋に妹大事と勞つてゐる。

(四)

横須賀軍港逸見安西醫院内

今井實

自分は今より六年前の四月醫術開業前期試験に
合格してから三月目に國の實家は商業上破産し
て學費はぱつたり絶て了つた、止を得ず苦學す
る決心で新聞配達を始めたが中々金が足らぬ、

其頃横濱に關と云ふ友人が居た、自分も苦し紛れに度々金の無心をしたが或時に彼自身の衣類を質に入れて自分に貢いで呉れた事も有る、情温かき友よと心に泣いて感謝して居た、そんな譯て其年の十二月の寒空にも綿の入つた衣類は一枚も無く早朝霜を踏んで配達に出掛る時の其の寒さ、實に肌を斷ち切らるゝが如き感じがす

る、一日午後七時頃夕刊配達を済せ、歸宅して見ると一個の小包が届いて居た、はて國からか知らん、と手に取つて見れば友人關君より來たのだ、何を送つて呉れたかと開いて見れば中より新しきメリヤスのシャツと股引が現れた、其瞬間ハッと胸に涙が込上げた、其時中より小さき紙片が落ちた、拾ひ上げて見れば鉛筆にて

「定めし君が寒からうと思つて……」之れまで
讀て自分は其シャツと股引に抱き付いて聲を忍
ばせて暫し泣入つた、自分は是程感動された事
は無ない。

(五)

京都府加佐郡河守上尋常高等小學校内

佐古田 誠太郎

余の學友で當時大阪市に寄留して青物商を營ん
て居る林田政七といふ者がある、元丹後の片田
舎の相當農家に生れたが打續く不幸に家運は衰
へ、政七が小學時代には殆ど貧苦の極に達した、

それ故修學旅行や運動會には只の一回も參加したことがなかつた、此時同窓生たる吾々は彼に同情の一涙に代ふるに嘲罵を以てした貧兒政七の心中如何許り口惜しかつたであらう、斯る間に漸く尋常科四ヶ年の課程を終へ、直に奮然として大阪に出て某青物商の丁稚となり、爾來粒々の辛苦を重ね遂に先般同業を自營することと

なつたが、不幸病魔の襲ふ所となり日に衰弱して所詮回復の覺束なきを觀念するに至つた、彼の淋しさ悲しさは察するに餘ありである、而も彼は病床に死を俟ちながらも、母校が懐かしい、『余の幼時と境遇を同じうする者には速に樂みを平等に分てやりたい、夫れには學校基本金だ』と今回富豪の萬金にもかへ難い三百兩を寄贈し

た之を聞いた吾々は事の意外に驚き且耻ぢざるを得なかつた、嗚呼偉大なるかな政七昨日の小僧今日の篤志家、是余の最も感動せし實例である。

(六)

在米國

放浪生

今年の春僕等在米同胞三人が、米國の不良青年

五人を相手にして桑港の街頭で白晝大喧嘩をやつた事がある、僕は先づ螺の様な拳骨を固めて突つて来る一人の腕を掴んで敷石の上にイヤと云ふ程叩き付けてやつた、打ち所が悪かつた爲か、泡を吹いて、氣絶したので、他の奴等は青くなつて逃出したが、其中巡查が来て有無を云はせず僕等を警察へ引致し薄暗い室に收監した、三

日許り経て裁判となつた僕等は唯有の儘、即ち先方から喧嘩を吹っ掛け、先づ突いて來た事を主張したが、何しろ言葉が十分に通じないので動もすると相手の爲に言捲られて形勢が頗る悪い、すると傍聴人の中から十三四の米國少年が席を離れてツカ／＼と判事の前に現れた、何を云ふかと思ふと、先づ自分は親しく喧嘩の現場

を見た一人である事を前提とし、滔々數萬言、米人側の不法を鳴らした後『近頃米國人が外國人に對して著しく不親切になつたことは、決して華盛頓やリンコインの精神ではない』と結論した、僕等は此有力なる應援を得て思はず泣いた、判検事も大に動かされたと見え遂に僕等は無罪を宣言された。

(七)

品川新宿十番地野村方

吉村進

私は近所に親子四人暮しの、林と云ふ家がある、
両親は何れも五十の坂を越して居る、二人の子
供は女許りて、姉が二十歳で妹が十八歳である、
以前は相當の資産家であつたさうだが父が或事

業に失敗の結果悲境に陥り、其の上病床の人と
なつて、三四年以來腰が立たず、今尙ほ病床の
人である、それ故に姉は人の針仕事をし、妹は
某工場に通つて、細くも生活の煙りを立て、居
る、此の二人は又た實に感ずべき孝行娘で、父
が三四年以來病床に在るのを、一日の如く看病
して何にかと氣を付けて居る、父も我子ながら

も三度に一度は氣の毒に感じると、二人は又たそれを打消して色々慰める斯うして此の姉妹は仲睦ましく、互に姉妹思ひである、妹は夕暮の五時と云へば工場を出て電車で家に歸る、姉は家に在つて其の時間になると、必ず妹の歸りを案じて電車の處迄迎へに行く、それが雨の日も風の日も、全く三百六十五日一日の如くてあ

る、私は此の姉が毎日妹を迎へに行く其の姿を見みると、實に何んとも言へない感動を與へられる、近所の者は涙を流して二人の幸福を祈つて居る。

(八)

松本市日の出町

矢口金吾

唯一疋の獸類、夫れにも義に感じて死をも願み
ない意氣が宿つて居た。過る月、信濃訪訪郡玉
川村獸醫某の家宅出火の際であつた、烈風は猛
火を煽つて紅蓮の舌は瞬時に居宅の全部を甜盡

して、凄じく焔と煙とは建物の中に漲つた、主
人の獸醫は此不意の災害に驚愕した、廐に於け
る愛馬を救はんものと獸醫は猛火の中に駆け込
んだが、機、一發もう遅かつた、雪崩の様に廐
の棟は墜落して、獸醫の姿は見えなかつた、刹
那は恐怖と狼狽の内に過ぎた、愛犬のポチ――
猛火に投じた渠は炎の中から昏倒した獸醫を銜

へ出して来た、渠は何處ともなく走り去つた、
群集は獸醫を介抱して居た時を経てポチは獸醫
の伴と共に疾駆して来た、二里を距てた伴の家
へ駆けて此の災害を報じたのが、渠ポチであつ
たのだ、燃盡した家宅と、倒れた獸醫と悲嘆に
叫んだ伴とを見廻してポチは一聲高く悲痛な咆
哮を洩らして其場に斃れた、渠の四脚と胴體と

は火傷の爲めに最早や立つことが出来なかつた
のだ、ポチの壯烈な死骸は群集の感激の涙によ
つて沐浴させられた唯一疋の犬。

(九)

静岡市裏一番町二五

松田北人

自分が静岡で商業を始めた時原木といふ米穀商

と向合むきあはせになつた、同家どうけは其頃そのころでも資産しさん二十萬まんと云いはれて一級きふの市會議員しゐいぎんだつた、見みて居ゐると主人しゆじんが小言こごと一ツ言いはないのに多勢おほぜいの店員てんゐんは朝あさから晩迄ばんまで實じつに克よくく働はたらく、翻ひるがへつて自分じぶんの店みせを見みると店員てんゐんから小僧こそう下女げぢよに至いたる迄まで叱しかつてもく動うごかない、缺損けつそんは嵩かさむ計はかりだ、自分じぶんも遂々とうとう氣きを腐くさらして雇人やうじんを全部ぜんぶ入替いんかへやうと思おもつて居をた或朝あるあさ、偶たま

然つとした事ことで法外はふがひな晨起はやおきをした、とする襦袢じゆばん着きの男おとこが薄暗うすぐらい中うちに戸外そとを掃はいて居ゐる、熟々よくよく見みると向むかひの主人しゆじんだつた如何いかにに迄までせんでもと思おもつたので物數ものず奇半きはん分ぶん其家そのこの店員てんゐんに尋たずねて見みて驚おどろいた、同どう氏は五十八歳ごじゅうはちさいの今日こんにち迄まで未いまだ嘗かつて一日いちにちも太陽たいやうが出でてから起おきた例ためしはなく、必かならず四時よじには床とこを出でて妻つまと二人ふたりで店みせへ出です饅頭まんぢう——其片隅そのかたすみで賣うつて居ゐ

る——を製へる、夫が蒸上がる頃に初めて家人
を起すのださうな、而も其饅頭は別段利益を得
やう爲でなく、只代々の辛勞を忘れぬ爲だとい
ふ事であつた、自分は豁然として悟つた、今日
幾分成功を收め得たのは一つに同氏の賜と常に
感謝して居る。

長野市西中町五四

江口高二

三菱造船工場に山川と云ふ造船工の組長が居る、
非常な勉強家で、一日十時間以上の然も過激な
労働時間あるにも拘はらず、寸陰も惜んで専門
書は勿論、新聞雑誌等迄も耽讀して勉學修養を

怠らない、其結果は可恐十二年前に小學を出た
 のみの人が今日では英字新聞を讀み、基礎科學
 や専門書は勿論英原書を讀むのだから大したも
 ので、一萬の職工其學力人格等に於て恐らく氏
 の右に出づる者はない、然も之れが皆多く獨學
 に依つて得たといふのだから實に驚嘆に價する
 ではないか、此間機械改良の工夫、工事制度の

献策等て賞せられた事も一再なく、昨年中は又
 多年苦心の餘に成りたる綿密な計算表類を纏め
 て一冊とし、獨力刊行實費分本をしたが、實地
 を基とした丈け此の社會に好評を博して居る、
 氏は之れに満足せず此書完成の目的で晝の疲れ
 も事とせず、補遺改竄の爲め毎夜十一時迄綿密
 な計算に餘念がないとの事、僕は毎夕喧々囂々

と家路を急ぐ青服郡中只一人書を黙讀しつゝ靜かに歸路に就く氏を見る毎に深甚なる感動を禁ずる事が出来ないのである。

(一一)

宇都宮兵營

近藤愛香

我が村内に原阿秋なる隠れた孝女が住んでゐる

す、一家は代々近在屈指の豪農でありましたが、父の代に悉皆蕩盡して、今では赤貧洗ふが如くであります、長兄次兄は日清日露の兩戦で美事の戦死を遂げましたが、搗てゝ加へて父は中風、母は眼病で、一家の悲嘆は其絶頂に達しました、阿秋は本年既に三十歳ですが、小學校の門から出る頃には、家運の衰頹に心痛して朝は早く夜

は晩く、女の細腕に鋤鍬を握り、肥料桶を肩に擔いで、撓まず、倦まず、労働を続けました、三人の弟妹は阿秋の健闘を見習つて、病親の看護と衣食の事に従ひました、重なる不運は一妹を早世させ頼みの綱の愛弟は堤防工事に出務中十丈の險崖から墜落して、哀れ不具者となつたのでした、一時は殆ど失神せん許りに驚愕し

た阿秋も是亦運命と達觀し、婚期を過すも意に介せず、今年三十の春を迎へて、朝は田に夕は野に、男も及ばぬ奮闘を續けてゐます閑あれば残つた一妹と共々病親を慰めて月洩る伏屋に庭の櫻を眺め乍ら語り更かす睦まじさは見る人聞く人感ぜぬ者はありません。

(三)

福井縣勝山町下元縁

島田 憲平

去る三月二十八日成器女子校の卒業式を參觀に出ました、卒業證書も渡され、校長の訓言もいと懇に濟んで方盆に一封校長の前へ運ばれた、校長は襟を正して「サテ皆さん茲に特別の褒美

を上げねばならぬ子があります、今年六年を卒業せられる浅井さんです、父親には幼時に分れ母の手一つで養はれました、家貧しくて母は毎日機屋へ雇はれ、少しづつの金を貰つて其日を暮して居りますが、貧しいながらも六年だけはさせたいと親心健氣にも尋常一年から今日迄になりました、浅井さんは少しでも手傳せねばな

らんと朝は登校前に悉皆家を掃除して後れずに
學校へ來る學校が濟むと直に子守に行く子守に
は子供を大切にせぬものが多いがこの子の守す
る子は若しこの娘が見えぬとワイ／＼云うて大
變探す、預つた子を大切にする事はこれでも解
ります、又決して我身一人では火を焚かぬ、子
供が火を弄ぶて過ちしたら申譯がないとの感心

心です、成績は八十人中四番です、病氣より外
休みません』澤山の參觀人も褒美を貰ひに出る
姿を見て泣きました、親が觀て居たら何んなて
なせうと。

京橋區東湊町一の二〇

佐藤 静之助

余が、豊後の銅山に事務見習として入つて居た時の事である、一日、急報は突如として、事務所に傳はつた、新坑第三號掘場の坑夫の天井が崩壊して、掘場に居る五人の坑夫の生死すら不

明である、恰度其時坑内から歸つた許りの坑長は、スツクと立ち上ると、カンテラを下げて、黙つて坑内へ走りつけた、其時には、報に接して坑内係や、坑夫が大勢集まつてガヤ／＼騒いで居た『早く山を除けッ、杵を組めッ』と坑長は命ずると共に、まだバラ／＼と天井から、鑛石の破片の落ち來る中に飛込ひと、自ら手を下

して、坑道を塞いだ鑛石を除け出した、坑夫等も、じつとして居られなくなつた、石を運び出す者、杵を組む者、其處には一種名狀す可からざる活氣が満ちた、斯くして午前十時から翌朝の午前一時に至る間、坑長は一時も其處を離れなかつた、そして漸と這つて出られる位の路が通じた時、皆は思はずドツと叫んだ、幸ひ坑夫

には一人の負傷者も無かつた、余は、坑長の部下を愛する情の深いのと、其の勇氣に感激せざるを得なかつたのである。

(一四)

無名氏

過る年郷里の新潟で或資産家にお秋といふ娘があつた、十七の春同町で山岸と云ふ家へ嫁した

が、發明狂の爲に僅の間に夫は可成の財産を烟にして了ひ借金も餘程積つて身動きの取れぬ破目になつた、其時親族は山岸を見限て離縁を勧る人もあつたが直に退け、何處迄も夫を補くべく決心したが其頃から郷里に居られなくなり三年前に東京に上つた、然し知邊のない身の上素より貯へのあるてない、一時は途方に暮れた、

木賃宿の親切で千住の或長屋の隅を借受けたが、夫は矢張發明に苦心する計り更に家事を顧みない、彼女の辛勞は並々でない、朝四時附近の原で餅草を獵り餅屋で某かの金と代へるそれから河岸の荷上を澄して初めて工場通ひ、或時は餘りの荷物の重さで棧橋から落下して直ぐ引き上げられた事もあつた、辨當は粥と梅干計りの爲

に女工連の嘲笑は毎日の様だ、併し此日課は更に怠らなかつた、夫の苦心の發明品は成つたが商は不得手、又々彼女が賣弘め行商に出る其困難容易でない、今でも市内の下駄屋に女商人を見受ける、即ち其人である。

(一五)

名古屋市中區仲之町三の十四橋爪清吉方

山田 明

僕と共に蕃地深く勤務した友人某が昨年の元旦蕃人と大に鯨飲した際過つて蕃人の一人を銃殺した、蕃人等は一時に激昂し手に手に武器を携へ某を取り巻き、復讐の舉に出んとした刹那、

老蕃タウイは早まる彼等に待と止た、見よ相手は今酩酊して死人同様である、斯る者を殺すは蕃人の耻辱也、吾は思ふ寧ろ覺醒した後堂々と復讐しては如何か、それとも不服なら吾から先に斃せと叫んだ、此一語には激し切つた蕃人等も稍や躊躇した、結局老蕃タウイの意見に従ふ事となつた、タウイは纔に彼れ某を救ひ、酔の

醒るを待て、先程の兇事と危険を語り、後は誓つて引受る故早く藩社を逃よと告げた、聞た某は色を失ひ惶惶蕃社を逃出た、其の遠く落延た頃を計り、某は逃げたとタウイは大聲疾呼した、蕃人等は蹶起追撃したが時已に遅かつた、罪はタウイに在るとして多くの蕃人はタウイの首を採るべく押寄し時はタウイは銃を取り自ら胸部を貫い

て見事に斃れた、蒙昧野蠻の蕃人の中にも、斯る血あり泪ある任俠深慮の老壯士が有つた、其遺兒に一男三女あり、現今某廳に收容養育してゐる。

(一六)

福島縣嘉穂郡飯塚町鯉田三菱炭坑三坑

片岡留吉

私の勤めて居る三菱炭坑の小頭に金音と云ふ六

十近くの老人が居る、近頃四十年以上の勤績者として縣廳から表彰された一人です、一雇員にも拘らず六十圓の月給と外に十二俵の口米が渡り加之自由出勤の恩典を受けて居る、然るに朝は五時に出勤して午後五時まで十二時間勤務して休みはしない、極至急な仕事などは夜十時過ぎ迄居残つて大工や日役と共に仕事を續け

られる事は少くない、坑長始め新進氣鋭の學士達の信任厚く恰も同坑顧問の様な觀がある、從つて試掘や機械据付其他新設備の際は必ず氏の指揮の下に仕事をします、炭坑の物は總て自己の私有物の様に大切に責任を重んじられる、公平無私の人で人の怨みを受けない、去る正月に賄賂的贈物を悉く門につるしたので贈つた人

は赤面して持ち歸つたと云ふ美談がある、又大の二宮尊徳先生崇拜者で衣服は日役達により粗末で少しも飾らない、衣を以て食の幾何も推せられやう、家に在りては荒地を開墾して農をして居られる、晩方肥桶を擔いて元氣よく通られる後姿を見る毎に私は深い感動に打たれます。

本所區小梅瓦町東武鐵道會社運輸課内

T T 生

東武線淺草驛の貨物掛に前川正治といふ青年が
ゐる、薄給で毎日十三時間に餘る勞動に等しい
勤務を物ともせず其のキビキビしい務め振りが
今は倉庫人足からまでも厚い信賴の的となつて

ゐる、よく平生の彼の務め振りを見るのに私
は未だ彼程眞剣な興味を仕事に寄せてゐる者を
見出した事がない、ほんの一例ではあるが彼が
劇務の餘暇寝る間を惜んで作成した貨物著名品
斥量賃金對照表の如きは自費によつて印刷せら
れ、東武線内百幾人の貨物掛が今計り知れぬ便
益を受けつゝあるのである、これは同じ貨物掛

の人も知つてゐる人は少ないが、彼は實に神奈川縣下有數の富豪にて父は多額納税議員として世に知られた名家の嫡子である、自ら進んで日給四十錢の貨物掛となつた理由は、將來自ら運送倉庫業を經營せんとする爲めの實地修業に他ならぬさうである、昨年中學を卒業すると直ぐ父に乞ふて強い自信の下に彼はこの劇しい實務

に就く事となつたのであつた、キビくしい小倉服姿の彼をブラットホームに見る毎に私は多く柔弱な世の富豪子弟と思ひ比べて無量の感慨に打たれるのである。

小石川區西古川町十九山本方

下平有秋

私は或郵便局の集配人を務めて居る、通信事業の大切な事は今更云ふまでもない、本所郵便局に十五年以來勤続せる若林寅之助と云ふ集配人がある、丁度舊臘廿四日頃肺結核に罹つて多

年病牀に呻吟せし其妻が俄然危篤に陥つた、然るに時期年末に際し郵便物輻輳の時なれば之を顧みる暇がない、局長始め全員晝夜の分ちなく活動して尙足らざる此際私事を以て公事を忽にするのは公の職務に従事する人の爲すべき事ではない、君は斯く覺悟を決め看護一切を母親に托して日々出局し、三十日よりは同僚一同

と共に局内起臥し一意専心職務に従事した明くれば大正三年一月四日の夕「最早駄目」と醫師は最後の宣告を下した、母親は此由を在局の夫に知らさん事を勧めたが雄々しき妻は肯ぜず「自分の爲に夫の心を沮喪させ事務上に過失ありては公衆に對して申譯なし」と斷然謝絶し莞爾として永眠した、七草過て歸宅せし君の始め

て妻の死を知りたる時の心の内は何んなてあつたらう、さはれ其責任を自覺して飽迄職務に忠實なりし若林夫妻の精神に、私は感動せずには居られない。

府下大井町

三崎士郎

私は嘗て米國聖路易の萬國博覽會で日本喫茶店を開き、三四人の日本兒童にお客様の接待をさせた事があります、好評判の結果、到底三四人の手では間に合はぬので、米國兒童の雇入廣告

を二三の新聞紙に出しました、二三日経つと十四五の美少年が一人てやつて来て使つて呉れと云ひます、給料に望みはないと云ふので、直ぐ其日から働いて貰ふ事としました、此子供は間もなく他の仲間と融和して少しも異邦人らしい感じを與へません、且つ接待振りが善いので店は尙多くの客を引付けました、流石に暑い大陸

の夏も過ぎて野鳥の如く飛び廻はつた學生連が
それ／＼母校に向つて歸る頃、私の店先に立
派な自動車が止まりました、中から現はれた氣
高い貴婦人は嚮に雇入れた小供の親なのです

『色々御世話になりましたが最う學校が初まる
ので御暇を頂きます』母親は丁寧な挨拶をして
小供を連れ歸りました、此婦人は同市の百萬長

者某夫人と云うて、毎年暑中休暇には此の如き
方法で愛兒に労働の尊さを教へるのだと判つて、
私は尠からず米國流の實際教育に感心しまし
た、

神田西小川町一の一竹澤方

渡邊安似

庫文賞懸報朝

私の家は朝鮮にある、父が渡韓した翌年市場から下新基詞に行く途中泥池があつた、交通上を思つて埋立てに従事し、新道を開いた、當時の村長（韓人）村の有力者は功に報うるに其の土地を以てし、尙弓場一帯何萬坪を數百金で賣つて呉た、登記もなく證文ばかりを取て置いた、父は數年後新事業計畫の爲に其の地を利用する事にした、俄然異議が持ち上つた、村長は行方不明、證文も不確實、故に所有權は認められず、公平に分配しやうとの事、父は黙した、其の日が來た、立合ひの上杭を打つ事になつた、時に

地を以てし、尙弓場一帯何萬坪を數百金で賣つて呉た、登記もなく證文ばかりを取て置いた、父は數年後新事業計畫の爲に其の地を利用する事にした、俄然異議が持ち上つた、村長は行方不明、證文も不確實、故に所有權は認められず、公平に分配しやうとの事、父は黙した、其の日が來た、立合ひの上杭を打つ事になつた、時に

杖によつて走せつけた白髪はくはつの韓人かんじん、木の下したを探たづつて掘出ほりだした木の片へら證文しやうもん及び當時たうじの事ことを燒字やきじにしたもの、父ちちの顔かほは喜よろこびに満みち皆みなは啞然あぜん、老人らうじんは爲ために公こうの賣買ばいばいを私わたくしに許ゆるした罰ばつにて牢らうに繋つながれたけれど、二年程ねんほどして許ゆるされ、爾後じこ家人かじんの樣ようにして居ゐた、其それから數年すうねん今裏山いまうらやまの青あをい柴しばの丸まるい塚つかに老人らうじんは眠ねむつてゐる、實じつに自分達じぶんたちが終世しやうせい

忘れてならぬ人ひとだと墓はかを仰あふぎ見みては父ちちは云いふ、毎年まいねん必かならず其日そのひには墓はか參まゐり、自分じぶんの庭宅ていたくを見下みおろす時ときには何なんとも云いへぬ感動かんどうに打うたれるのである。

(三)

遼陽車輛

田中吉

野戰鐵道時代の遼陽機關庫に、組立工中島氷肌

といふ青年があつた、温厚勤勉、且つ書も書き書も上手、英語も讀めて職工社會中群鷄の孤鶴であつた、當時鐵の機關車は、何れも運轉に耐へざる様な老廢的に引替へて、百萬の大軍に戎器、彈藥、糧食を供給する輸送が無性に多忙を極め、終業後は日々修繕に追はれ通して、職工諸君は晝夜兼行の勞働に皆澁面造つて居たが、

君は何時もニコ／＼主義で、精限り働いて居た、或晩の事、是非共翌朝迄に煙櫃内の厄介な修繕をする機關車があつた、君と支那人とて仕事する事となつて、宵の中は二人で懸命にやつて居つたが、夜半僕が見廻りに行くと、大汗を流して働いて居る君は疲れた支那人を傍に寝かして置いて遂に一睡もせず、見事翌朝迄此の困

難な修繕を完了したのであつた、僕は愈よ君の無限の精力と崇高な人格に驚いた、惜哉、君は二十四五歳を一期としてチブスを病み不歸の客となられた、僕の二十年間の労働生涯中君の如き良職工を又と見た事がない。

余が最も感動せし實例終

大正三年八月十八日印刷
大正三年八月廿二日發行

定價金拾八錢

編輯者

中央書院編輯局

發行者

石田彦三郎

印刷者

窪政鉄

印刷所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二
株式會社 秀英舎第一工場



發行所

中央書院

東京市本郷區元町二丁目三十番地
振替口座一五七八〇番

有益多趣味なる好評ある出版物

●中央書院圖書目錄●

- | | | | |
|---|-------------|--------|--------------------|
| ● | 加藤咄堂先生著 | 修道講話 | 定價金壹圓二十錢
送費金八錢 |
| ● | 加藤咄堂先生著 | 處世講話 | 定價金壹圓二十錢
送費金八錢 |
| ● | 加藤咄堂先生著 | 英雄と修養 | 定價金壹圓三十錢
送費金拾貳錢 |
| ● | 加藤咄堂先生著 | 國民性と宗教 | 定價金壹圓三十錢
送費金十二錢 |
| ● | 文學博士前田慧雲先生著 | 佛教思想講話 | 定價金壹圓二十錢
送費金八錢 |
| ● | 文學博士南條文雄先生著 | 通俗佛教講話 | 定價金壹圓四拾錢
送費金拾貳錢 |

有益多趣味なる好評ある出版物

- 篁川臨風先生著
畫趣と詩味
定價金壹圓二十錢
送費金八錢
- 篁川臨風先生著
山中鹿之助
定價金壹圓拾錢
送費金八錢
- 江部鴨村先生著
織田信長
定價金壹圓五拾錢
送費金拾貳錢
- 實說 青木日蔭先生著
釋迦一代記
定價金九拾五錢
送費金八錢
- 實說 樋口龍峽先生著
日蓮一代記
定價金壹圓
送費金八錢
- 實說 樋口龍峽先生著
群衆論
定價金壹圓三十錢
送費金八錢
- 樋口龍峽先生著
現代思潮論
定價金貳圓也
送費金拾貳錢

有益多趣味なる好評ある出版物

- 横山健堂先生著
趣味と人物
定價金壹圓七拾錢
送費金拾貳錢
- 横山健堂先生著
薩摩と琉球
定價金貳圓四拾錢
送費金拾六錢
- 國民軍事協會著
日米開戰
定價金九拾五錢
送費金八錢
- 西川文子女史著
婦人解放論
定價金壹圓也
送費金八錢
- 後藤矢峰先生著
腕白物語
定價金八拾五錢
送費金八錢
- 勳臣 押川春浪先生著
海上の秘密
定價金七拾錢
送費金八錢
- 篁川臨風先生著
伊達模様
定價金九拾五錢
送費金八錢

有益多趣味なる好評ある出版物

◎ 山路愛山先生著
現代富豪論

定價金壹圓也
送費金八錢

◎ 押川春浪先生著
大隈重信

定價金壹圓也
送費金八錢

◎ 東洋醫學會著
實驗健康法

定價金六拾錢
送費金八錢

近刊

法學博士 江木衷先生
法學博士 原嘉道先生合
法學博士 鵜澤聰明先生著
法學博士 大場茂馬先生著

以上四大家が刑法上に關する新研究を一般的に發表せらるもの九月上旬出來

274
908

終

